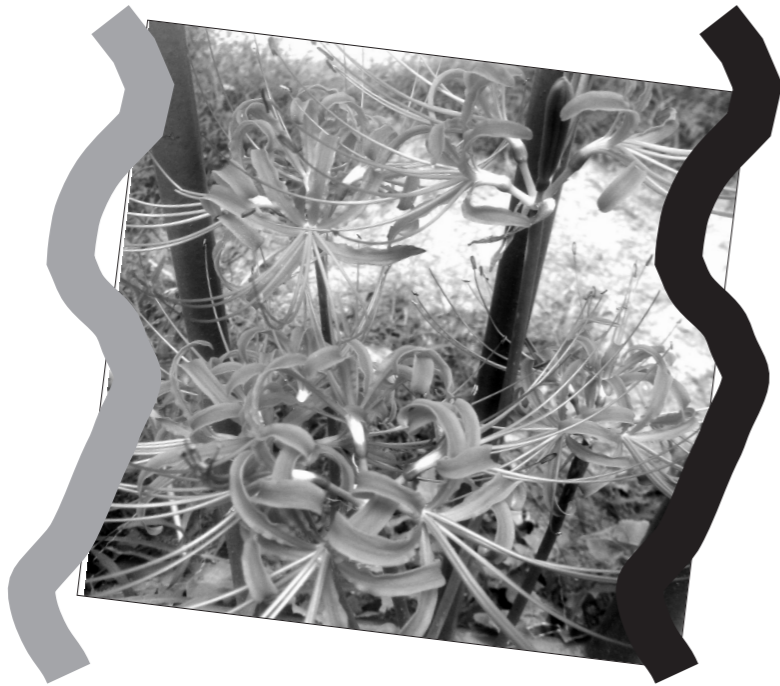

月 刊

MéLange

Vol.106



2015.09.27

詩と評論

月刊「MéLange」

Vol.106 2015.09.27

「月刊めらんじゅ」編集部

詩 & 俳句 & 短歌

ICHの内面……………岩脇リーベル豊美 04

ホイアンを行く……………大西久代 04

瞑想明滅……………野口裕 05

テーブルの隅に座るゾウ……………黒田ナオ 06

〈夏すぎで〉風立ちぬ 二十句 (俳句)／時分どき 三十首(短歌)……………高橋雅城 07

大太法師／遊覧船から……………福田知子 08

ナマズ／雨の降る日に／傀儡／アリクイおじさん……………中嶋康雄 09

断断細細……………大西隆志 10

詩人……………月村香 11

傾くわたし—晩夏一日一抄……………大橋愛由等 12

古代碑文……………有時秀記 13

或る九月の臨終日における場末の鳥鳴き声を下水に流して……………千田草介 13

そっくりのうた……………高谷和幸 14

ゆくえ……………富哲世 15

連載エッセイ & 詩評

ひと言詩評〈9〉……………富哲世 03

神戸詞あしび93「朋を見送り映像詩学に酔い京都に向かう」……………大橋愛由等 16

編集部日より★27/9月の「Melange」月例会は、いままでと異なる構成となりました。第一部は、本誌に掲載しております詩稿(俳句、短歌)の合評会を開催(いつもなら第二部で開催)。第二部として、上野都訳『尹東柱詩集 空と風と星と詩』(コールサック社)を読む会といたしました。上野氏はあとかぎの冒頭で以下のように書いています。「今年の二月十六日、京都市の同志社大学で、詩人・尹東柱を偲ぶ小さな集まりを持った。この会が開かれるようになって三年目であるが、尹東柱が亡くなってからなんと七十回目の祥月命日であった。すぐに雪雲がやってきて底冷えのする冬の京都には珍しく、満開の紅白の梅に、青い空から明るい陽射しが差し込むキャンパスの一隅、「序詩」の刻まれた彼の詩碑のまえに集った。」その追悼会は私が詩人・金里博氏と共催しているもので、毎回俳句を作ることで追悼としている。〈春まだき異語拒みし詩人あり／愛由等〉 〈大橋記〉

富哲世
ひと言詩評 9

〈飽和と孤律〉川田絢音詩集「雁の世」。

雁の世

喉声で鳴き
光らない眼差しを交わし
人をも聴いている
雁の群れを見ていると
人の姿の視線をそそぐにたえないのが感じられる
穴を穿ち
黄の影で満たして
タンポポの低い頭れもわたしたちには真似できない
樞は内と外との裂け目を身に刻み
貨車で運ばれ
深い傷でみずからを覆って通っていく
貨車の上で
老いた妻をかばう掌
オシフィエンチムに着くまで

(全行引用)

「アウシュヴィッツにつながる鉄路の上では喉も目も耳も押し黙って、無事の世のすべてが見るに堪えない風景となって、わだかまっているということ、
わたしたちとは
自らのペールに物の影を穿ち
わたし以外のものには化身できない何かであるということ、
内と外の裂け目としてみずからを覆う傷となって
ブナが他人のように、横たわる自分のかたちのように貨車に積まれて

まれて

運ばれていくということ、
それでもてのひらは老いた妻の肩や頬にこころの傘のように
優しく置かれることかできるといふこと。

怒りでもない眼差しがわたしと〈彼ら〉を重ね合わせる。
「空の時間」以降「ピサ通り」から「朝のカフェ」に至るまで

ひたすら足元の光景に目を据えて弱さの病いの在りかを執拗に見定め続けようとしていたかのような川田絢音の確かさの漂流は、以降次第に内面世界を潜ってその足取りの孤の力強さ、の様相を得て来るような気がする。その歩行原理は、今の飽和と孤律の無辜ともいふべきものだが、この度の詩集では、満たされれば満たされるほど孤立していく孤立の有情ともいふべき蓄えが、より意識的に死への隣接としても捉えられようとしていると思える。

所業をよそに、因果も無く現れて来る嵌め込まれた事物、歴史の前で黙っている人々、世界の装置に満たされて来るものの数々、ときにはそんな事象に共鳴する胸の空洞を空虚そのもののように膨らんでくる飽和のいたたまれなさや、その飽和の大きさを食い破る死の掟への虫のような微細な突出(脱出)としてのいのちの束の間の充溢の実状を見定めようとしているかに見える。

人はどんなやり方をしても救われないが
わたしたちにそれが必要なのだろう

(「長い橋」)

わたしたちは「それ」に何を代入するのだろうか。
近しいものへの距離を感じながら、しばし、を重ねていくそのことばの歩行はいづれも、心の在りかを求めつづけていて、その寡黙な凝視は、外と内との両界で捨て身の喉をいっばいに膨らませて、非完結的な、脱—現在のな歩みの今の、幻視の地平へとたどり着こうとしている。

(2015年5月 思潮社)

◆ホイアンに行く

大西久代

晴れあがる三月の空
 水の街はランタン飾りに揺れる
 シンクロを踏む男の背に日ざしがしたたる
 路地の両側から垂れ下がるブルーゲンビレアの強烈な
 赤 紫 ピンク
 山と積まれた竹籠細工 鮮やかな額絵 アオザイに群がる人の眼
 異国の人々とすれ違いながらチャンフー通りを抜ける
 日本人がかつて暮らした街
 幼年の歓声がこだまして四百年前の顔が
 石橋を飛び越える
 葉を広げた樹の陰に佇み アーチ形の橋を仰ぎ見ると
 他国の空を仰いだ遠い声がため息となり流れる
 開け放たれた窓から
 風に舞う見えない花びら
 過ぎ去った時のかなたに咽び泣いた人の声を掬ってみる
 トンボン川からのぬるい風
 この街は今も
 郷愁を抱いている

◆ICCHの内面

岩脇リーベル豊美

秋日のマロニエの身一つ
 完結するICCH
 反響せずレフレクションを
 くり返す
 固有名詞か
 それとも人称代名詞
 ICCHはただひたすら
 ICCHであればよいのに

◆瞑想明滅

野口 裕

知的障害を負った息子は映画好きである。子供向けのアニメや動きの派手なアクション物・SF物などを所望することが多いのだが、年頃のせいでも、たまに恋愛映画を注文する。その手の映画にはしばしば濃厚なキスシーンが登場するので、どんな顔して見ているのかと隣席を観察すると、そんな時に限ってぐうぐう寝ていたりする。どうも間延びした会話が苦手のようだ。にもかかわらず、時として間延びした会話が連続する時代劇に行きたがるから彼の趣味・嗜好は分からない。もちろん、そんな映画では始めからすやすや寝息を立てている。付添の当方としては、どうもフィクションに入り込めないまま、チラチラと光の明滅を暗闇の中で見つめるのみとなり、あれやこれやとりとめぬい考え事を繰り広げることになる。

過去は未来の集積
 岐路となるたびに思い出と出会う
 禅僧の瞑想は羊水の記憶
 拙者には縁遠くてといいつつも
 猫の代わりの蒟蒻殺しか
 ああ エンドロールが蜿蜒と続き
 始まりに向けて逆転しはじめる

◆テーブルの隅に座るゾウ

黒田ナオ

退屈な会議の途中で気がついた。テーブルの一番隅に座っているのはゾウである。ゾウは太い皺だらけの鼻から生臭いにおいの息を吹き出すと、静かに、自分の体よりずっと小さな木の椅子に窮屈そうに腰かけていた。誰かが嘘ばかりしゃべり続けている。

誰かが嘘ばかりしゃべり続けている。しゃべりながら舌がずんずん伸びてくる。舌と一緒に時間も伸びる。のつぺりとした長い長い時間。欠伸の輪がぶかりぶかりぶかり、浮かんでは天井まで昇つて。目尻に溜まる涙。その涙よりもっと小さな虹の橋。窓の向こうでインディアンが踊った。

窓の向こうでインディアンが踊った。音の無い空間で、誠実な卵が笑う。退屈なゾウは考えていた。世界の果て、深い深い地面の底に眠る腐りかけた巨大なバナナについて。甘くてうんざりとする、その匂いについて。ますます絡みついてくる嘘ばかりの熱弁と、バナナの匂いのする時限爆弾について。

◆夏すぎて

高橋雅城

時分どき 三十首

風立ちぬ 二十句

割箸を割るおと秋の初めとす
鯛のあたり葉莢拾ふなり
失踪がまた一人とせ稲光
納棺を終へり草蜉蝣とまる
引越の荷を見届くるばつたかな
月光やコンパスの揺れ鎮まりぬ
革財布くたびれてをり蚯蚓鳴く
妹の行く方知れず赤い羽根
逆上がりくると釣瓶落しかな
ザムザ氏が死して百年秋ともし
肖像の斜視を正しぬ秋の夜
晩婚の一日のつひ虫時雨
野分来てラジオに知らぬ言葉かな
ふぐり大きな犬の行くなか彼岸花
穴まどひ横切る道に標なく
月光や聖書に書き込むこと二三
秋燈や大きく異国の面笑ふ
散髪を済ませ初秋を歩くなり
家出する時や柘榴を握りしむ
若妻も髭面も喰ふ衣かつぎ

時分どきえんどう豆がころころと行く先知れず奥様は留守
つままれて逃げたえんどう豆だからいい子いい子してあげないよ
三時半過ぎて絹さやえんどうの時間来ましたモスラやモスラ
空豆の空には鳥はいませんが豆には何かいた気がします
つるさんは〇〇むしと米を研ぎ吹いてますけど何かご意見？
オムライスたまご巻くのは鮮やかにいい日旅立ち妻の春服
塩鮭を焼いて皮ごと喰らつては今日はいいい日になるかもしれない
ウルトラの母に尋ねて出自ならばくは変身しないけれども
てにをはをちゃんとと言います春だから剛力彩芽もそうしていると
まる虫がころりころりと出家して土手の蓬にいるそうですよ
夕刻にお茶碗欠いたの誰だろう狐狸妖怪の知るや知らずや
絵描きうた途中で忘れありもせぬ手足描いて地獄極楽
かくれんぼしては大人になりそこね繰り言ひとつもういいかいと
さくら湯の一つ一つの花びらが散らないうちの三月みそか
塩漬けの桜の香る餡パンの凹みが変わりたくらいな
あけぼのにリボンの騎士になるという夢はあけぼの春愁まなか
へのへのも まで書いてみてふと思っ片仮名のムは男らしいぞ
すの文字は子に似て〇一つ 〇の奥にはまだ何かいる
さ と ち の字少し似てると言っただならさつちやんさち子が少しむくれて
悩ましいほくらだからと謙遜をしなくていいよ出自出生
あなたならマントはおれば飛べるはずレーニン像を片腕に抱き
身の内を話す海鼠がいるらしい教科書体で言うかも知れない
この香りうちの奥様帰宅かな？ 蛇の目くるりと振り向いたから
生来のお転婆にして春日傘くるくる回しどこまで飛ぶの？
グレゴール・ザムザのような変身に偽善偽悪が行ったり来たり
アルベール・カミュは交通事故死して現実がふと青色ペンキ
立冬にサッポロ一番味噌ラーメン湯気の中から大王が来る
寒余るセブンイレブンいい気分 変身するなら天王の湯気に
寒中に三寒四温 妻笑うまた階段でつまずいたのね
シの意味知らずにすんだ二〇〇〇年生まれの君よさあ戦いだ

◆ 大太法師

だいだらぼっち

福田知子

ユトリ口の絵から追放された 一本の老いたビワの木 女神の水浴を盗み見た罰だった 泉のほとりでたつぷり太陽を浴び膨らんだその実は 老人たちの丸眼鏡に反射して楕円形に歪んだ 手の施しようもないほど巨大化したびわの実は モンマルトルの丘から遙か一万キロメートルもの彼方 太古からの窪地 スペインの酒袋《ボタ》のような楕円形の窪地に青い水を吐き出した 何万トンもの青い水を何万年も吐き続けた

すっかり痩せたビワの実 干からびた枝葉は街道をゆく馬の手綱になった ビワの木の花は細かく裂かれて盲僧琵琶の絃になり 裳狩りの夢を潜り抜け 天国への夢を追いつけることをやめないでいる
ダイダラボッチ ダイダラボッチ びわびわびわああん ダイダラボッチ
ダイダラボッチ びわびわびわああん ダイダラボッチ
ダイダラボッチ びわびわびわああん………

◆ 遊覧船から

福田知子

揺りいでてみると そこは大きな湖の上だった
ミシガンという船
観光という場違い な
タラップの二人を襲う
不意を突くシャッター音
行き場のないはずの——
促されてカシヤツ 観光業者のカメラに収まる

そこにとどめられた二つの影は湖の底に沈められ浮かび上がることは二度となない
狂い始めたのはそのころだった
狂った影は湖底から這い出てどこかの暗部で喘いでいるのか

島に着いた
大勢の人々のあとについて二人は降りた
——三時間半で出港します
それまでに船に戻ってください

ここに留まるのも縁かもしれない

揺りいでてみると そこは帰らずの島海ではないから視界が届く限りの半島を
目指してみても
弧状の円環からは逃れられなかった
くろずんだ頬は怯え 腹は不自然に飛び出ている
生きる気力を失った腹
アルコールを吸収し続ける 腹
不自然に折り目のついたズボンに点々とシミ
不自然にゴムぞうりを履いたひとに
島に残ることをうながしてみる
諾の気配はない たぶん
ひとりでも泳いででも家に戻るのだから

◆ ナマズ

中嶋康雄

ナマズの機嫌が悪いので
シュークリームをたたみ続ける
お経はよまれ
仏は帰り支度を整えつつ
酒を飲んで飲んで
居場所を縮み続けている
母などが黙って背中を押している夕暮れ

税金が上がり続ける
しがらみはミミズのように土に潜る
ホースで水をまく
穴からながれ漏れているから
機嫌が悪いナマズが育つ
黒い洋傘が開いたり閉じたり
蟬が出てくる穴の暗さに躓く
腐るのはよいことだし
穴はやたら運び込まれ
昼は酒びたりで
嘘のことが好きになりやすい
いつまでもとどまるわけにもゆかず
機嫌が悪いナマズのおかげで
漸く戻る夕暮れ
シュークリームをたたむ手を見る
残照
傷み続けるお土産に浸食され
影も
よぼよぼ杖をつく

◆ 雨の降る日に

中嶋康雄

雨の降る日に
戸を叩く
紫陽花が枯れている
花も葉も枯れている
だらしなく垂れ下がりが
雨の滴を垂れ流す
目立たないものが
集っている
枯れた水を飲んで
ますます茶色く変色している
死ぬわけではなさそう
薄くなるわけではなさそう
ひっくりかえって
弱っている
夕暮れの煙が
弱りを加速する
どうしようもなく
加速を背中に乗せながら
雨の降る日に
戸を叩く
いつの間にか
湿気をまとった
ティッシュペーパーの
まとわりつく冷たい気配が
戸口で長靴を脱いでいる
茶色いものが
もぞもぞと
薄汚れた滴を垂らして
しなだれかか
腹が空いたといいながら
ベットに誘う

◆ 傀儡

中嶋康雄

傀儡の斜辺の淫らさに
夜の睡魔も踊りだす
よかつたことなどなにもない
よかつたねえ
と人は言う
なにもないのが
よいことなのだ
道すがらに論される
鴉みたくに
小さいおばあさんが
淫らに死んでいたりする
得体の知れない雑草が
死んだ目玉を
蔓でそぞろに撫でている
酒飲みが
わけのわからないことを
吹きながら
吐き気を忍ぶ
脇をすり抜け
最終バスは
行ってしまったし
カエルはいつの間にか絶滅してしまっ
たし
寒い夜なら
おかきを食べる
暑い夜なら
水を飲む
なんの傀儡かわからない
よろよろしたも
並んで歩く
ひよろひよろしたもの
並んで歩く

◆ アリクイおじさん

中嶋康雄

まだまだひっくりつかえるわけにも
ゆかず
叫びを抑えて
ゆっくり歩く

おじさんがアリをペロペロ食っている
アスファルトを歩くアリは
美味しいらしい
アスファルトの酸味が効いて
美味しいらしい
おじさんは道路に座って
舌をペロペロ出しているから
気味悪がられているらしい
アリが行進する限り
なにがどうでもいらしい
おじさんは神といつも語っているら
しい

おじさんはときどき噴水で水浴びを
するらしい
むかしは池で水浴びをしたらしい
ホテイアオイが邪魔らしい
ホテイアオイは花が咲くからいら
しい
長い舌をペロリとやると
女子高生は笑いながら逃げるので
ときどき追いかけてみるらしい
眠っていると
小学生に棒でつつかれるらしい
おじさんは棒でつつかれてもいら
しい
アリが食えれば神がいるからいら
しい

◆断断細細

大西隆志

顔ダ
 皺ダラケノ顔
 皺ニ見エタガ傷跡ノ描線
 顔ダ、顔ダラケノ一郭
 老ダラケ、トハ生キ延ビタ唯唯
 飯粒、涙モ、ハリツイタ顔
 口紅モ、優シイ愛撫モ
 棍棒デ、拳骨デ殴ラレタ
 記憶ノシミコンダ顔
 首ハ天頂ニムカイ
 肩ハ首ヲ支エテイル
 昭和ヲ地凶ニマーキングシテ
 顔ダラケ
 目ハ堆積シタ時間ト
 アンタ、死者ニ向カッテイクノヨ
 日向ニ置カレタ
 視線ニ蚊ガトンデイル
 顔ノ中心カラソレタ目ヲ

耳ト口デ支エテイル
 変形シタ耳ハ
 口ノ発スル声ヲ
 何度トナク聞イテシマウ
 嗚咽ハ
 顔ト顔ノ間ニ零レ
 齒ハイツマデモ微音ニツツマレ
 命令ニシミコム悪意
 断ツ、断ツコトデ
 細カク顔ガ震エテイル
 ブレル地表ニ
 顔ハトドマル
 顔ダ
 目ヲ押サエタ顔ダ
 口ニ蓋シタ顔ダ
 耳ガ塞ガレタ顔ダ
 皺カラマボロシノ芽ガ
 トットト
 快晴ノ日々ニ
 枝ヲヒロゲテイク
 身体ヲ崩レサセナイタメニ
 顔ダ
 顔ダラケノ意味ニ
 花ガヒラク

◆詩人

月村香

わたしは葬儀のあとに下着と靴以外のすべて
 をクリーニングに出した雨だったからそれが
 ひとつの仕事だと思つた次にバッグをあけて
 雨にぬれたそれはだらんとした黒だったけど
 そうしなればならないと思つたからタオル
 でよくふいた男の人が道をゆづってくれたと
 きそれは葬儀のあとだったからか紅茶を飲む
 ときは注文したのを待ってそれがようやく訪
 れテーブルに置かれる瞬間が一番楽しいす
 にちよつと汗をかきかけてわたしを見てすね
 てる感じが実にかわいらしい電話をしている
 あいだに足がつつてばかりいるのできょうの
 疲れのせいだなと感じながらナッツを食べる
 少しはいやさねなければならぬいい加減わ
 れわれはいやさねなければならぬのだ

◆傾くわたし——晩夏一日一抄

大橋愛由等

※04／8月24日

公園で立ちどまる
向かいあった樹木から
対が
掛けあっている
あともうすこし
ここで聴いていた
許されないのはわかつている
枝がゆれている かすか
葉群は しずかを よそおう
ぼくも しずかに 生き
あるものすべてに
アパシーでいようか
このまま は 気弱だから
蔭たちにもいつも追われ
ふおるむを替え
昨日の蔭から
語りかけられても
立ったまま
知らぬふりをしている

※05／8月25日

閉じ込めたのは だれ
飛べない鳥たちを
ながめてもなにも思わず
裏声をつかって
ガーベラに声をかけても
八月の雲が
叙情詩のようでも
日曜日の夜だけ
カーテンが少し開いて
のぞいている
世界を ぼくを
いつか
石になる日のために
独逸製8Bえんぴつ
夜に翔ぶ種たち
待ちつづける声 を
傘をもたない雨の日に
麻袋に入れて
左脚から歩き出す

※06／8月26日

溶けないまま
群れの中へ入ると
逆巻く 塊 だけが
側溝を伝え走りして
独り木陰をめぎすのを
とめようがなく
からだは 群れの向かうままに
ゆだねるほどに
失われていく
茜色への拘泥
みしらぬ人からの
みしらぬ演繹を
玉糸とするのは
愚かだと
なんと唱えても
ひたすら に 生きる
からだたち は ただ
群れ であることを
気遣うばかり

◆古代碑文

有時秀記

「ネーランジャラー河のほとりにたたずむ幻の鳥が垂直に飛び立つとき、孔雀の脱げがらに火が灯り、鳳凰が琴を奏でる。九相を超える白い悟りは喜びの河面を乳白色にしみ出し、天の河にまで流れこんでいった」

この碑文は脊椎動物の骨に刻まれていたが、碑文の内容が夢でなかったのは、河面を超えて流れるあまたの奏音が自我崩壊の山脈を超えたからだ、賢者のなかの賢者が伝える。

東と西の不安症候群の民があまたの心的崩壊寸前に踏みとどまることができるのは、その崩壊の現象に寄り添う悟りの賢者が、網のように知と愛を張り巡らしているからだ。

奏でられる音が崩壊の山脈を超えると、その山脈を月は明るく照らし、日は穏やかに照らす。照らしの前に、自我崩壊の深層因子は苦難の果てに解読され、九相は乳色に化粧され、化仏によって救われる。血の滲むような知と愛によって解かれる自我崩壊の放射光は、天の河にまでとどく花である。あちらから来訪した由緒ある花である。その花の由緒を、おおかたの人は知らない。

◆或る九月の臨終日における

場末の鳥鳴き声を下水に流して

千田草介

肉質の残骸はそうなる直前まで生命線をたどっていたとは限らず商品となった一工程をはさんでいたかもしれないのですから電送で数千、数万ロット各地に配布されていたとも推測されるわけで、なにかの間違いで滞貨により肉厚の異常大気現象をおこした可能性はスパコンでの析出は無理で鯨尺と電気炊飯器の湯気の按配と消火栓の錆具合によるト占によらなければ高積雲の群れが鳥変換するのを突き止めることなど出来るはずがないのであります。したがって地下変換は原子時計塔の示す針を首相が総合的判断することにより地表面より下一万四千米に至る生命個体総数の今後百年間にわたる推移を小数点以下五万八千七百六十一桁まで求めることで導き出されるのは間違いのないことであり、和蠟燭の生産本数と出生率の因果関係を究明することや、高速道路の総延長距離とその上を走る輸送用アジアウの頭数の相互依存関係を解析することが、生物社会経済気象物理学のひとつの骨子と断ずることができるわけであります。

◆そつくりのうた

高谷和幸

それぞれのそうり
あつぶれらをすぼめて
くけいのひつぎにはいる
しんぐがうちがわからもえている

それぞれのそうり
しょうねんからかえるじかんをわすれる
なみうちぎわにはんずぼんが
うつぶせたまま

それぞれのそうり
おじいちゃんのぎしきで
おぼけになるが
きんいろのゆめにうなされる

それぞれのそうり
そうりと
わたしのそうりのそうり
のそつくり

◆ゆくえ

富 哲世

光の蛭 食んで
そして大通り。

百合の鉢植えを窓辺に育て
身がわりになれないものを
我慢できない舟べりに運んで
莞爾して
溺れる壁に指を這わせてー。

昼は飲もう
群青いろの
血のつぶの
屋台屋さんのおでんで
死のかたちをのせて
西へと向かう 貨物列車の片隅で
てっぺんで
はぐれて

大きなハンドルを切つてバスは坂道を降りていく

ぼくらは猫につまづいている
もたらされた人生の背丈から
消え入ろうとする
痕跡に
ついていかなければ。

「ピノッキオはどこに？」
顔を洗い、

みちくさということばに
夢であつて目覚めた朝に
鏡にひたいを合わせたまま
まだ冷たく自分でいる

砂丘の陰から顔をのぞかせ
迷子の子が「雪のライン」を越えてくるだろう。

そばにいて
(ください)

息をこらして
聞いている
背中から
身を起こし
秋の

うた 神戸詞あしび

95-2015.09.27 大橋愛由等



水郷として名高い福岡県柳川市。
白秋の原風景はここにある

詩人を生んだ柳川は うるわしき水郷の地

八月、九州を旅した。「白秋さん」に会う目的で福岡県柳川市に向かった。萩原朔太郎は白秋の人となりをご紹介している。「北原氏の感じがいちばん好きな所は、どこかぼんやりとした所があつて、それが非常に魅惑的なあたたかさをもつてゐることです。あの人の手や身体の丸々とした

私の郷里柳河は水郷である。さうして静かな廃市の一つである。自然の風物は如何にも南国的であるが、既に柳河の街を貫通する数知れぬ溝渠のほひには日に日に廃れてゆく古い封建時代の白壁が今なほ懐かしい影を映す。(北原白秋「生ひたちの記」より)

夜の水郷めぐりをして時であつた。小魚が勢いあまつて舟に飛び込んで来た。こうしたささやかな事変にも乗り合わせた観客はちいさな歓声をあげて悦ぶのである。

あたたかみは非常に女性的の肉感をあたへます。白秋記念館に掲げられた大きな写真もにこやかに微笑んでいた。朔太郎の書いていたことを首肯したくなる。詩、短歌、童謡、新民謡といった幅広いジャンルをまたいで表現した北原白秋(一八八五〜一九四二)は、どこか「白秋さん」と呼びたくなるようなまろやかなイメージがある。

わたしが今回の柳川紀行を縁として、白秋の作品世界に注目したのは、詩集『邪宗門』(一九〇九)『思ひ出』(一九一〇)を上梓することで、絢爛な抒情世界を構築して、一躍詩人として盛名を得たそのつぎの時期(一九二二〜一九二〇)である。年齢で言えば二七歳から三五歳にあたる。白秋の作品世界が大きく変わっていくのである。この時期白秋にとって人生を左右するいくつかの事態が発生していた。一九二二年、姦通罪で訴えられ取監されている。世間からは糾弾され、一時は死を覚悟するほど落ち込む。二年後には、その姦通罪とともに訴えられた俊子(第一夫人)と結ばれるものの、翌年には離婚している。うまくいかなかったのだ。つづいて一九一六年に、文学的才能があつた章子(第二夫人)と結婚する。筆一本で食べていこうとする白秋だったが、執筆依頼はほとんどなく、貧乏をきわめ、ただ一日ぼんやりと机の前にたたずんでいる時もあった。そんな食にも窮する時期に朔太郎は出会っているが、白秋の「身体の丸々としたあたたかみ」は減じることにはなかつたのであろう(こうした貧窮時代をささえた章子とも一九二〇年には離別している)。

しかしこの時期に白秋が書き残した詩と短歌は、この二つのジャンルを交差し、響きあいながら、創作されている。「白秋の短歌制作は：詩作に先行している。そして生涯を通じて詩作と平行して歌作は継続された。」木俣修。また自分の境遇をありていに作品に反映させているのも大きな特徴である。それはのちの創作態度にも現れていた。白秋は、その時々々に生きたおのれのありようを詩の言語に昇華する才に長けていたのである。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.106
神戸

2015年09月27日 通巻106号
発行所/月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)
maroad66454@gmail.com
定価 600円(税込)